

## 分 析

1. 本アンケート回答者28人中89.3%の方が女性でした。本来男性での対応がふさわしいボランティア活動が多くあることを考えると課題を残す数字といえます。今後は男性ボランティアの育成・活動の促進に力を入れていくとともに育成講座等も企画段階から上記について留意し魅力あるものにしていく必要があるでしょう。
2. 本アンケート回答者の年齢は、50才代が12人 43.0 %と最も多く、次いで60才代が7人 25.0 %となっています。若い世代のボランティア活動への参加が少ないということは、本市に限ったことではなく全国的な風潮のようですから、学校教育における”福祉意識の醸成“にも期待されるところです。社協としても市教育委員会のご協力を得て、小中学生を対象とした育成・啓発事業に取り組むとともに、可能な限り小・中・高等学校における福祉教育が望ましい型で展開されるようにお手伝いしていきたいと考えています。（※神奈川県福祉教育研究協議会が、昭和61年 3月26日教育長宛提出した「福祉教育指導資料・最終報告書」を骨子に事業をプログラミング・展開していきたい考えです。）
3. 本アンケート回答者の職業ですが、専業の主婦と回答された方が14人50.0%と最も多く、次いで無職と回答された方が7人25.0%となっています。三浦市保健福祉サービス推進委員会が、平成元年3月23日に市長宛提出した施策の提言のなかでも、女性の就業率の向上による地域社会への貢献度の低下を問題視していましたが、ここでもそんな社会現象の一端を見ることができます。たとえば就労していても、わずかな時間を効率的に活用することによって可能となる活動が多くあることに鑑み、今後社協としては、実質的サービスの提供のみをボランティアと位置付けてしまう市民の認識をかえるべく、広範多岐にわたるボランティア活動の紹介をしていきたいと考えています。
4. 回答者の在住年数ですが、20年以上と回答された方が最も多く13人、46.4%となっています。しかし、平成元年度のボランティア登録者を見ると10人中7人70.0%の方が5年末満の新住民でした。

今後社協としては、本市の土地柄を熟知する市民層のボランティア活動への参加を促進し、その特性を発揮していただくとともに、「地域福祉に関する地区懇談会」の開催や、ボランティアの育成・活動促進事業へ参画していただくことについても検討していきたい考えです。

5. 本アンケート回答者の17人 60.7 %の方が南下浦地区在住と回答しておりこの地区のボランティアに対する関心の高さが伺えます。今後社協は、本市を三崎・南下浦・初声の3地区に分割し、各地域の特性にあわせたボランティア育成講座を開催したいと考えています。

※本アンケートは、三浦市南下浦市民センターにおいて開催された「ボランティア初級講座」の参加者を対象に実施したのですが 参加者の内訳は三崎地区29人、南下浦地区32人、初声地区10人、 その他14人となっています。

6. 福祉ボランティアに関心がありますか？の問いに対して28人 100 %の方が関心があると回答したいです。最近高齢化問題等がマスコミに取り上げられる機会が多く“福祉”の2文字をよく見かけますが、市民意識としては危機感を持っているというよりも時代傾向を感覚として捉えているというのが、一般的な認識だと思われれます。依然として福祉の問題は“蚊帳の外”とあって差し支えないでしょう。今後社協としては、高齢社会を迎えての、“福祉充実の時代傾向”をうまく活用して、「関心を活動へ」移行すべくボランティア関連事業を推進していきたい考えです。

7. あなたはボランティア活動をしたことがありますか？の問いに対して、28人中13人の46.4%、本アンケート回答者の約半数の方がボランティア活動をしたことがあると回答しています。また、ボランティア活動をしたいと思いませんか？の問いから、約8割の76.0%の方が活動を希望していることがわかりました。今後社協としては、こうした貴重な人的資源を効率的に活動へ結びつけるための需給調整機能の充実をはかると共に、データベース化についても検討していきたい考えです。8. ボランティア活動を希望する76.0%の方に、日時・場所・対象といった具体的に望む活動内容を聞いてみたところ、「不定期に地域で老人を対象としたボランティア活動」を望む方が最も多くいることがわかりました。

9. 「出来ることを無理のない範囲で・・・」ボランティア活動実践上の基本理念として、本アンケート回答者の半数近くの方がこう答えています。また、この自由意見の中には「ボランティア活動の促進と同時に、国・県・市は行政責任を明確化すべきだ」あるいは「報酬を求めないこと」などといったボランティアの基本的な3つの理念をあげている方もいました。今後社協としては、この3つの理念に「創造性」を加え、よりボランティアの主体性と社会性を確立していきたいと考えています。

※一般的にボランティアの特質という、「やる気」・「世直し」・「手弁当」の3つがあげられますが、この「やる気」とはボランティアの主体性を表現し、「世直し」とは、社会福祉問題を個人的に解決するのではなく社会的に解決しようとする社会性や連帯性を指しています。「手弁当」とは、言わずもがな利益追求の活動ではないこと、すなわち「無償性」を意味します。これを要約して「主体性」・「社会性」・「無償性」——いわゆるボランティアの3つの理念とといいます。

※ボランティアの無償性の問題については「福祉関係職員のボランティアに対するアンケート」の結果と分析の中でふれたいと思います。

10. 本アンケート回答者の100 %の方がボランティアに関心を持っていることを考えると、「登録制度」・「相談コーナー」・「社協みうらのボランティア情報」の周知度は低いと言わざるをえません。今後社協にもこの分野の活動（広報・啓発事業）の充実が求められてくるでしょう。
11. ボランティアをしている人をどう思いますか？の問いに対して「尊敬しています。」・「感謝しています。」と回答された方が最も多く12人いましたが、中には「自己満足に終ることなく、もっと活動の輪を広げてほしい。」という方もいて、ボランティア活動上の大きなテーマである、社会性の確立がまだまだなされていないことを指摘しています。
12. 身近にボランティア活動をしている人がいますか？の問いに、28人中10人 35.7%の方がいると回答しています。今後社協としても、育成・活動促進事業を推進し、こうした回答が多くなるよう努めていきたい考えです。

13. あなたの家族や知人に障害を持つ方がいますか？の問いに、28人中11人 39.3%の方がいると回答しています。今回の講座の受講者の中に相当な割合で福祉関係者がいたことにもよりますが、こうした福祉問題を現実に抱える方の経験をボランティアとして「介護教室」等でいかしていただくことは、福祉問題に社会性を持たせ、同時にニーズに即応できる福祉（介護）ボランティアの育成・活動の促進に大きな効果を示すと考えられます。
14. ボランティア活動の促進・育成に対する社協への意見の一つに、ボランティア活動を統括する機関としての社協の位置付けの弱さを指摘したものがありませんでしたが、これは、偏にボランティア活動の需給調整機能の弱さ、つまりこの分野の活動がシステムとして確立していなかったことを指すものだと思います。「ボランティア相談コーナー」の充実と、コーディネーターの配置、そしてそのコーディネーターの専門性の確立が緊急な課題といえるでしょう。

②

福祉関係職員のボランティアに対するアンケート  
結果と分析

回答率は56.0%でした(140人中79人が回答しました。)

[問-1] あなたの所属する部署についてお答え下さい。

1. 福祉課	18人 = 23.4%	2. 社会課	2人 = 2.6%
3. 健康づくり課	2人 = 2.6%	4. 美山ホーム	30人 = 38.9%
5. はまゆう作業所	4人 = 5.2%	6. 心身障害児生活訓練会	
7. 重度障害者生活訓練会	1人 = 1.3%	3人 = 3.9%	
8. その他	17人 = 22.1%		
計	77人 = 97.5%		

[問-2] 今までボランティア活動をしたことがありますか？

1. ある	24人 = 30.4%	2. ない	53人 = 67.1%
3. その他	2人 = 2.5%		
計	79人 = 100%		

[問-2-1] 前項で1と答えた方に伺います。それはどのような活動  
ですか？(24人から記載があった)

・老人ホームの調理補助・福祉関係の当事者団体と健常者によるレク  
リエーション ・ボーイスカウト ・学生の頃学校の福祉委員会に  
所属していたのでいろいろな施設にいかせていただきました。3人  
・点字 ・保健衛生活動(理髪・つめ切り・血圧測定) ・入浴ボ  
ランティア ・美山ホームのディサービス手伝い ・障害者の車椅子  
介助、旅行同行、店の手伝い、朗読、作品作りを共に ・老人ホーム  
での入所者に対して入浴介助、オムツ交換、寝衣交換、身のまわりの  
世話 ・青年育成ボランティア ・老人ホームの訪問ボランティア  
・老人ホームのオムツたたみボランティア ・公園の清掃 ・地域の  
葬式の手伝い ・一人暮らし老人等の相談 老人、障害者の日常生  
活援助3人 ・行事の交通整理 ・食生活改善推進団体の会員で地域